



葎

大阪発達総合療育センター機関紙
第7号 平成24年9月

社会福祉法人 愛徳福祉会

大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center

保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院



社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長

梶浦 一郎

職員研修実施状況

H24年6月～9月

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

| 実施日時 | 企画部署 | 研修名 | 講師 | 参加人数 | 場所 |
|------------------------------|----------|---|-----------------------------------|------|-------|
| 平成24年6月6日(水) 17:30～18:30 | 感染対策委員会 | 歯周病管理と口腔ケア | ウェルテック株式会社 樋口敦子氏 | 50名 | 5階ホール |
| 平成24年6月12日(火) 17:30～18:30 | 教育研修部 | 服部祥子先生シリーズ講義1 思春期を中核に置く生涯人間発達論(総論) | 大阪人間科学大学 名誉教授 服部祥子 先生 | 112名 | 5階ホール |
| 平成24年6月18日(月) 17:30～18:30 | 褥瘡対策委員会 | 体圧分散寝具と看護・介護技術 | 株式会社モルテン | 40名 | 5階ホール |
| 平成24年6月25日(月) 17:30～18:30 | 摂食嚥下チーム | 摂食嚥下チームの活動報告会 | 小児外科部長 塩川智司 | 92名 | 5階ホール |
| 平成24年6月29日(金) 17:30～18:30 | リハ・看護部合同 | 看護部・リハ部合同勉強会 「家庭療育について(ポバースコンセプト)」 | リハ部副部長 茂原直子 | 45名 | PT室 |
| 平成24年7月5日(木) 17:30～18:30 | 教育研修部 | 諏訪は見た!猫(=^_^=)も知らないカンボジア | 看護部 諏訪恵子 | 44名 | 5階ホール |
| 平成24年7月21日(土) 9:00～15:30 | 看護部 | 重症心身障害児看護集中講座 I | フェニックス園長 船戸正久 小児科医師 馬場清 | 15名 | 2階自習室 |
| 平成24年7月25日(水) 17:30～18:30 | 教育研修部 | HPS 活動報告 施設で行える外あそび | 看護部2階病棟主任 市川雅子(HPS) | 42名 | 5階ホール |
| 平成24年7月27日(金) 17:30～18:30 | リハ・看護部合同 | 看護部・リハ部合同勉強会 「早期療育でのチームワークの実際・ふたば事例から」 | リハ部教育研修科科长 松本茂樹 通園部ふたば主任 井田亜樹子 | 38名 | PT室 |
| 平成24年9月5日(水) 17:30～18:30 | 教育研修部 | 「ネパールと私」 JICA報告 | リハ部PT 黒川めぐみ | 56名 | 5階ホール |
| 平成24年9月11日(火) 17:30～18:30 | 教育研修部 | 先天異常の子どもを持つ両親のケア 周産期から始まるケアとその実際 | 竹内徹 理事 | 106名 | 5階ホール |
| 平成24年9月20日(木) 17:30～18:30 | 教育研修部 | 笑いとはしてNST その笑顔にあいたくて | 診療部 栄養科科长 西口千加 | 64名 | 5階ホール |
| 平成24年9月25日(火) 17:30～18:30 | 教育研修部 | 服部祥子先生シリーズ講義2 思春期を中核に置く生涯人間発達論(乳幼児期) | 大阪人間科学大学 名誉教授 服部祥子 先生 | 100名 | 5階ホール |

感謝

【寄付金と寄付物品】

大阪発達総合療育センターへの
御理解・御協力
誠にありがとうございます

一般寄付金

| 寄付者(敬称略) | 月日 |
|------------|----|
| 楽基金(110件) | 6月 |
| 匿名 | 6月 |
| 楽基金(62件) | 7月 |
| フェニックス家族の会 | 8月 |
| 西野俊一 | 8月 |
| 楽基金(9件) | 8月 |

平成24年8月31日現在

イベント トピックス

わかば なつまつり

なでしこ スポーツフェスティバル



いつもは和やかな仲間が赤組と白組に分かれて対決の火花を散らし、リズム体操では練習の成果が発揮。大玉ころがしでは笑顔がこぼれそれぞれが一丸となって戦いました。

優勝トロフィー授与式ではみんなが満面の笑顔でお互いの雄志を称えあい、これからのなでしこでの活動がさらに充実したものになっていくと感ずいます。
みなさん、おつかれさまでした!!

8月20日(土)に、わかば病棟夏祭りがおこなわれました。おはげやしきにヨーヨー釣り、ゲームに綿菓子・バルーンアート、様々な模擬店があり、「こわかった!」「たくさん釣れた!」「景品これにしてん」「甘くておいしい!」「剣作ってもらった!」など、みんなのうれしい声とひかいました。

また、わかば病棟オリジナル夏祭りの踊りもあり、スタッフと子ども達みんな楽しく踊りました。踊りの曲に合わせて、手作り楽器を鳴らしてくれたり、ご父兄参加方の綿菓子早食い競争をしたりと大いに盛り上がりを見せた夏祭りとなりました。



■ 秋の訪れに思う

猛威をふるった灼熱の気候も、さすがに9月中ごろになると朝・晩は少し涼しくなり、秋を感じさせます。しかし、世の中を見廻しますと着るどころか、慌ただしいことばかりです。なかでも驚いたのは、大阪に本社のある超一流の電器メーカーが経営に行きづまり、海外の資本に援助を求めているというニュースでした。職員は2万人余りのうち5,000人リストラ、給料10%カットなど厳しい案が出ているようです。つい最近まで世界一の技術で液晶パネルを作り、工場も拡張していると聞いていました。私には経営、業界の事情など何も分かりませんから想像しかできませんが、世界一の成功が問題の一つだったのではないかと思います。成功するとついそれに馴れてつまずくと云われています。私たち自身のこととして、油断することなく仕事をしていきたいと思ひます。

■ レット症候群研究班会議に出席

過日8月26日(日)東京の国立精神・神経医療研究センターにて厚生労働省障害者総合対策事業である「レット症候群の早期診断と治療をめざした統合的研究」の第1回班会議に整形外科の立場からの参加依頼を受け出席しました。現在54例のケースをフォローし、うち42例の側弯の治療を行っていることを発言しましたが、分子科学レベルの先端的研究において、当センターでまとまった実例数を診ていることはとても貴重であることを再認識しました。第2回の会議は本年12月中旬に大阪で行われます。

■ 特集に寄せて

今回の特集は、NMCS(新生児診療相互援助システム)の当センターにおける取り組みと、ボツリヌストキシン療法の紹介です。NMCSは、理事および顧問をお願いしております竹内徹先生が初代会長としてその礎を築かれ、フェニックス園長である船戸正久先生が三代目現会長を担っておられる、大阪から全国に誇る新生児医療専門施設の自発的な相互援助のシステムです。大きな問題となっているNICU(新生児集中治療室)長期入院児者のための後方支援として、昨年より新たな取り組みを開始しました。ボツリヌストキシン療法は、脳性まひの痙縮への新たな治療手段として注目を浴びており、当センターでは整形外科部長の藤田良先生が中心となって取り組まれています。いずれも療育における小児科および整形外科領域の先端的研究であり、皆さんとのチーム医療により、子どもたちやご家族により良い支援を行おうとするものです。これからの展開に大いに期待しております。



大阪発達総合療育センター

発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会
発行責任者・梶浦一郎

URL : <http://osaka-drc.jp>

【保険医療機関】 南大阪小児リハビリテーション病院
【児童福祉施設】 南大阪療育園 障害児入所・通所支援事業(肢体不自由児)
フェニックス 障害児入所・通所支援事業(重症心身障害児者)

【指定訪問看護事業】 訪問看護ステーション めぐみ

〒546-0035 大阪市東住吉区山坂 5-11-21
TEL 06-6699-8731 FAX 06-6699-8134

【児童福祉施設】 あさしお園 障害児通所支援事業(肢体不自由児)
ゆうなぎ園 障害児通所支援事業(難聴児)

〒552-0004 大阪市港区夕風 2-5-3
TEL 06-6574-2521 FAX 06-6574-2524

NMCS(新生児診療相互援助システム) 後方支援プロジェクト



大阪発達総合療育センターフェニックス園長
南大阪小児リハビリテーション病院院長

船戸 正久

大阪には、低出生体重児や生後間もない赤ちゃんが呼吸障害など病気になったとき、新生児専門施設でお互いに助け合うNMCS(新生児診療相互援助システム)という日本に誇る優れたシステムがあります。このシステムは、最初1977年に7つの病院が淀川キリスト教病院に集まって、「大阪で生まれた病気の赤ちゃんをすべて新生児専門施設へ入院させよう」という主旨のもと各病院のボランティア活動として始まりました(初代会長は当センター理事の竹内徹先生)。現在5大学病院を含む28病院が参加して活発に活動を行っています。

一方近年周産期医療の進歩により、「NICU(新生児集中治療室)という家から帰れない子供たち」というようなNICU長期入院児が大きな問題になっています。こうした子どもたちは、超早産の慢性肺疾患だけでなく、先天奇形、低酸素性虚血性脳症、神経筋疾患など引き続き高度医療が必要な超重症児・準超重症児の子どもが含まれています。

現在大阪市内には、こうした子どもたちの受け皿になる重症心身障害児施設として当センターの「フェニックス」を入れて2施設・110床、大阪府下では4施設・655床、大阪全体で計765床の入所ベッドがあります(内ショートステイは、77床)。しかしどの施設も満床で新規受入れが不可能な状態です(ただし2012年4月に堺市に開設された施設は50床で堺市を中心に順次新規入所を進めています、まだ絶対数が足りません)。

当センターは、1970年に肢体不自由児治療施設「聖母整肢園」として最初開設され、1982年には「南大阪療育園」と改名しました。2006年には重症心身障害児入所施設「フェニックス」を新たに開設し、同時に全体の施設を「大阪発達総合療育センター」と命名しました。さらに



2010年には訪問看護ステーション「めぐみ」を開設しました。2012年4月には病院名のみ「南大阪療育園」から「南大阪小児リハビリテーション病院」と改名しました。現在当センターのベット数は、医療型障害児入所(主として肢体不自由児棟):40床、(主として重症心身障害児(者)棟):80床(内ショートステイ:17床)の計120床です。

私が当センターに赴任した2011年4月から大阪のNMCS、すなわち新生児医療機関と協働して行う長期入院児のための後方支援を開始しました。大阪府の調査によるとNICUなどの長期入院児は、6か月以上115名、1年以上58名を占めます(2008年)。こうした児に対してNMCS病院から当センターへ2-3カ月の転院していただき、1)在宅移行支援、2)総合リハ支援、3)ショートステイ利用準備など、医師・看護師・リハスタッフ・介護士・保育士・HPS(Hospital Play Specialist)等による家庭生活を想定した総合療育指導を行っています(中間施設の役割)。今までに延べ5名利用し、在宅生活の総合的イメージ得られるとご家族にも大変喜んでいただき、基本的にNMCS病院に帰院後すべて在宅移行を実現しています。私自身も、このプロジェクトを通し当センターの総合力とチームワークの素晴らしさを実感することができました。現在(2012年7月)利用中2名、利用予定3名、問合せ2名、状態の変化によりキャンセル2名です。今までの紹介または問合せ病院は、大阪府立母子保健総合医療センター、八尾市立病院、大阪日本赤十字病院、淀川キリスト教病院、愛媛県立中央病院、国立大阪医療センター、府立急性期総合医療センター、千船病院、大阪市立大学、大阪大学などです。

今後当センターとしても理念にある「地域支援」を視野に入れ、ショートステイの活用、訪問看護・訪問リハの推進に加え、在宅移行支援、総合リハ支援を目的としたNICUの後方支援を進め、NMCSと協働して「子どもの最善の利益は、地域や家庭で家族と共に過ごすこと」の実現に努めたいと思います。子どものQOL(いのちの輝き)のために皆さまのご協力を宜しく申し上げます。

【当法人理念】(ホームページより)

私たちは障害を持つ人々が地域において
安心して生活できるよう支援します。



脳性麻痺患者へのボツリヌス毒素療法への取り組み



整形外科部長

藤田 良

当センターでのボツリヌス治療件数、は平成18年度の1件に始まり平成19年度16件、20年度50件、21年度262件と増加していましたが、平成22年10月に上肢痙縮、下肢痙縮への保険適用が認められたことにより、上肢への治療が開始され、かつ治療対象が成人へ拡大しました。それにより、平成22年度273件が、平成24年度は408件と大幅に増加しています。

ボツリヌス毒素の効果は、緊張している筋肉に直接注射することで、異常な筋収縮に伴う症状を軽減するというものです。注射するだけでも、筋肉の緊張の軽減が得られ、手足を他動的に動かしやすくなって介助がしやすくなったり、歩行時踵がつきやすくなったりといった効果が認められます。しかしながら、それだけでは効果が3~4ヶ月で消失してしまうため、機能の改善はあまり期待できません。

筋肉の緊張が緩んでいるうちに、拮抗筋(注射したのと反対の働きをする筋肉)の随意性をたかめ、筋力を向上させることにより、はじめて機能向上が可能になります。そのためには、ボツリヌス毒素治療後の自主訓練をふくめたりリハビリテーションが重要です。当センターでは、ボツリヌス毒素治療後、その効果を高めるための入園リハビリテーションも行っております。

ボツリヌス毒素の効果の出方には個人差があり、特に下肢や体幹への治療では、劇的に効果がある人がいらっしゃる一方で、全く効果の出ない方も残念ながらいらっしゃいます。しかしなが

ら、上肢への治療では、効果の度合いに差はあるものの、比較的確実に痙縮の軽減が得られることがわかってきました。上肢については、ボツリヌス治療とそれに続く短期間の入園で、かなりの機能向上が得られる場合があります。

当センターでは、上肢への治療に対し、今年度よりMURO Solution(Pacific Supply社製)という随意運動助型の電気刺激装置を導入し、拮抗筋への運動学習を促す試みも開始しています。

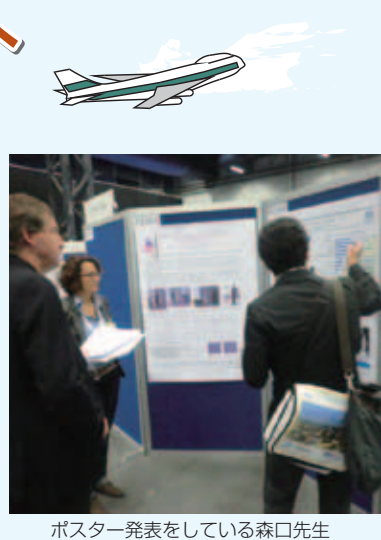
ボツリヌス毒素治療で、脳性麻痺に付随する問題のすべてが解決するわけではありません。股関節脱臼に対しては、ボツリヌス治療は脱臼の進行をコントロールして手術の時期を遅らせる効果はあるかもしれませんが、手術を回避することはできないといわれています。尖足変形に対しても、ボツリヌス毒素治療で尖足変形が軽減し、手術を回避できる患者さんもいらっしゃいますが、ボツリヌス毒素治療を行っていても進行がコントロールできず、手術を行った患者さんも複数おられます。手術後再発してきた内反や尖足の変形に対し、ボツリヌス治療を行っている患者さんもおられます。

アテトーゼ患者さんへの治療では、痙縮のシフトがみられることがあり、伸ばせなかった関節が今度は曲げられなくなるといった逆パターンの変形を引き起こすこともあります。そのため、施注前の十分な評価と慎重な経過観察が必要です。また、嚥下や呼吸に問題のある患者さんでは、直接呼吸や嚥下に関する筋肉に施注していても、その症状を悪化させる場合があります、慎重に投与する必要があります。

このように、いろいろな問題はあるものの、ボツリヌス毒素治療は脳性麻痺患者さんのリハビリテーションを行う上で、治療薬としては第一選択薬であり、かつ非常に有効な補助手段であることは間違いありません。治療を試してみたいという方は、外来にご相談ください。

プレーリーくん世界へ

去る9月8日~11日スウェーデンの首都ストックホルムで開催された第16回欧州神経学会議(EFNS2012)で大阪大学整形外科医森口悠先生とリハビリテーション部 松井吉裕PTが“Management of scoliosis due to Rett syndrome with the novel spinal brace”の演題でポスター発表を行った。レット症候群の側彎症に対するプレーリーくんの効果を示すもので、これまで対処されていなかった分野であり、フロアから積極的な質問もあり反響は良好であった。梶浦先生が開発したプレーリーくんが世界へとその第1歩を踏み出した。



ポスター発表をしている森口先生



ポスターの前で森口先生(右)と松井さん(左)